

お前はもう降りられない  
止まった観覧車の  
頂上で元担任に在学中  
からずっと我慢してた  
と囁かれ逃げ場のない  
空中密室で三回中出し  
される話

「え——止まっ……」

「大丈夫。メンテナンスだって。すぐ動く」

白石先生の声は、いつも通りだった。高校の時と変わらない、ホームルームで連絡事項を読み上げるトーン。なのに僕の手首をそっと掴んでいる。

——掴んでいる。

「先生？ 手……」

「奏汰」

名前で呼ばれた。

柊じゃなくて、奏汰。先生が僕をそう呼んだのは初めてだった。その二文字が鼓膜を震わせた途端、手首を掴む力が少しだけ強くなる。

「せん、せ——」

眼鏡を外した。

白石先生の、眼鏡のない顔を僕は知らなかった。切れ長の目が剥き出しになって、いつもの柔らかい光が消えている。底の抜けた井戸みたいな、暗くて深い何かがそこにあった。

「高二の保健室。覚えてるか」

心臓が跳ねた。

あの日のことは覚えている。体質検査だと言われて、保健室のベッドに横になって——先生の指が僕の秘密に触れた、あの日。

「お前のカント、触診した日」

先生の親指が、僕の手首の内側をゆっくり撫でた。脈を測るみたいに。

「あの日から三年間。ずっと我慢してた」

「な——何、言って——」

「卒業するまで待った。教え子には手を出さない。それが最後の理性だった」

対面シートから引き寄せられる。逆らう間もなかった。先生の隣——肩がぶつかる距離に座らされて、ゴンドラの狭さを初めて思い知る。

「でも、もう卒業したよな？」

（——逃げなきゃ）

頭ではそう思っているのに、身体が動かなかった。ガラスの向こうに地上の灯りが豆粒みたいに見えて、ここが地上65メートルだと思い出した瞬間、足が竦む。

「暴れると揺れるぞ」

ゴンドラがぎし、と軋んだ。

「落ちたいか？」

静かな声。怒鳴られた方がまだましだった。低い声で淡々と追い詰められる方が、ずっと怖い。

パーカーの裾から手が入ってきた。大きな手。教壇でチョークを持っていた指が、僕の腹を撫で上げる。

「やめ、てくださ——」

「三年待ったんだ。もう少しだけ付き合え」

ジーンズのボタンが外される。ぱちん、という小さな音がゴンドラの中でやけに響いた。太腿を閉じようとしたら、先生の膝でこじ開けられる。力の差が、どうしようもなかった。

先生の指が、下着の上から僕のカントをなぞった。

「ンッ——♡」

(——嘘)

声が出た。布越しに触られただけで。

「ここだ」

ゆっくりと割れ目を辿る指。布の上から、肉の形をなぞるように。

「保健室で触った時、こんなに濡れてなかったけどな」

(濡れてない……濡れてなんか——)

でも先生の指に、確かに湿り気が伝わっているのが分かった。身体が勝手に反応している。男なのに。男の身体なのに、ここだけが女みたいに濡れて——。

(やだ……なんで……っ♡♡ こんな簡単に反応するなんて……っ♡♡)

下着をずらされた。

「やっ——見ないで——っ♡」

「三年間、これを想像してた」

先生の長い指が、カントの入り口をゆっくり探し当てる。  
爪の先で割れ目をそっと開かれて、夜風がゴンドラの隙間から吹き込んで、濡れたそこにひやりと触れた。

「ッ♡♡ ひ、う……っ♡」

親指がクリトリスに触れた。小さな突起を見つけ出して、円を描くように擦る。もう片方の手の中指が、入り口にじわじわと沈んでいく。

「あ……っ、せんせ、だめ……♡ そこ、だめ……っ♡♡」

「声、出していいよ。誰にも聞こえない。地上65メートルだ」

中指が第一関節まで入った。

「ン`ン` ッッ♡♡」

くぐもった声が堪えられなかった。指一本がこんなに存在感を持つなんて知らなかった。カントの内壁が異物を締め出そうとして、けれどそうすることで余計に先生の指の形をなぞってしまう。

（やだっ……♡♡ 先生の指……分かっちゃう……太くて、硬くて……っ♡♡）

「三年分だ。我慢させた分、ゆっくりほぐしてやる」

先生の指が奥へ進んだ。膜が押し広げられる鈍い痛み、涙がにじむ。でも先生は止まらない。僕のカントを少しずつ自分の指に慣らしていく。

くちゅ、と音がした。

「やだ……聞かないで……っ♡」

「いい音だ」

耳元で囁かれて、首筋の産毛が逆立った。

二本目が入る。きつい。痛い。でも一本目で慣らされた壁が、抵抗しつつもゆっくりと道を譲った。

先生の指先が、内壁のある一点を撫で上げた。

ぐり、と。

「ひあっ——♡♡♡」

腰が跳ねた。

「ここか」

(やだ、何そこ——知らない、そんな場所——っ♡♡)

先生の指がその一点に居座って、的確に、執拗に、擦り上げてくる。身体の奥に知らない回路があって、それが先生の指で無理やり通電させられていく感覚。

「やめ——っ♡ やだ、やだ、先生、そこだめ……っ♡♡」

「嫌なのに腰が動いてるぞ」

「ちがっ……♡♡ ちが、勝手にっ——あッ♡♡♡」

三本目が入った。

ぬちゃり、と粘度の高い水音がゴンドラの中に響く。先生の手ひらが僕のカントから溢れた蜜で濡れて、太腿を伝い落ちるのが分かった。

「先生の指、三本入ってるよ」

(嘘……♡♡ 三本も……僕のカントに……っ♡♡)

「お前のカント、すげえ締めてくる。嬉しいのか？」

「ちが……っ♡♡ う、おっ、おおお……っ♡♡♡」

三本の指が中を搔き回した。いちばん奥の、さっき見つけられた場所を、三本の指先が代わる代わる抉る。もう「やめて」の「や」の字も出てこない。頭の中が白い靄で塗り潰されていく。

(嫌だ……嫌なのに、気持ちいい……♡♡ 男なのに、カントで気持ちよくなって——)

(カントなんかで……こんなに蕩けちゃうの、おかしい——っ♡♡)

ゴンドラがぎしぎしと揺れている。先生の指が動くたびに、僕の身体が震えるたびに。ガラスの外で遠くのイルミネーションが瞬いていて、こんなに綺麗な夜景の真ん中で僕はカントを指三本で抉られている。

「お♡ お♡ おっ♡♡ ——ッ♡♡♡」

知らない場所に落ちた。

全身がびくびく痙攣して、カントが先生の指をぎゅうぎゅう搾る。自分の意思じゃない。身体が勝手に、先生の指を離さないように締めつけている。

先生は指を抜かなかった。痙攣が収まるまで中に留まったまま、余韻を味わうみたいに内壁をゆっくり撫でている。

「あ……♡♡ やだ、まだ、動かさないで……っ♡♡」

「綺麗にいったな」

先生が僕を見下ろしている。眼鏡のない目が、暗いゴンドラの中で獣みたいに光っていた。

絶頂の余韻で朦朧としている僕を、先生がシートに押し倒した。狭い座面に仰向けにされて、片足だけジーンズと下着を完全に脱がされる。蒸し暑い空気が剥き出しのカントに触れて、ぞくりとした。

ベルトの金属が擦れる音。

かちやり。

その音だけで、何が始まるか分かった。

「せん、せ——やだ、それ入らない……っ♡♡」

「入るよ。さっき三本入っただろ。ちゃんとほぐした」

先生のものが、カントの入り口に押し当てられた。

——指とは、比べ物にならなかった。

熱い。硬い。太い。体温よりずっと高い熱の塊が、割れ目を押し広げようとしている。

「ずっとこうしかった」

(怖い……っ♡♡なのにカントが……先生のを受け入れようとしてる……♡♡)



恐怖と快感の境目が溶けている。先生の声だけが静かで、それが余計に怖い。でも身体はもう区別がつかなくなっていた。

「保健室でお前のカント触った日から。——頂くよ」

ずぶ、と先端が入った。

「おおおッ♡♡♡」

悲鳴が出た。でも先生は一气には来ない。じわじわと、ミリ単位で、僕のカントを押し広げていく。三年間待った男の異常な忍耐。急がない。焦らない。けれど、絶対に止まらない。

(割れる——割かれてる——先生のおちんぼでカントが——♡♡♡)

根元まで収まった時、涙が頬を伝っていた。痛みと、恐怖と、それから——認めたくない、奥の方で疼く何か。

先生が涙を舌で拭った。

「泣くな。気持ちよくしてやるから」

ゆっくりとした律動が始まった。最初は浅く、僕の反応を見ながら角度と深さを調整していく。教壇に立っていた人間の目。生徒の理解度を読み取っていたあの観察眼が、今は僕の快感の波を測っている。

「んっ……♡ うっ……あ……♡♡」

声を殺そうとする。口を手で押さえて、奥歯を噛んで、絶対にこれ以上声なんか出さないと――。

ずん、と角度が変わった。

「ひあっ♡♡♡」

さっき指で見つけられた場所を、おちんぼの先端で突き上げられた。指の比じゃない。もっと太くて、もっと硬くて、もっと――。

「そこだろ。さっき指で見つけた場所」

（なんで分かるの――なんでそこばかり――♡♡）

（おちんぼの先っぽが……あの場所にぐりぐり押し当てられてる……っ♡♡ 指より全然すごいっ♡♡）

先生のピッチが上がっていく。ゴンドラが腰の動きに合わせて微かに揺れた。ぐちゅ、ずちゅ、とカントの中から水音が響いて、密閉されたゴンドラの中に反響する。

「あ、あっ♡♡ 音、やだ……聞こえちゃう……っ♡♡」

「聞こえていいよ。お前のカントの音だ」

「やだ……っ♡♡ そんなの、僕の――あッ♡♡♡」

先生が僕の片足を肩に担ぎ上げた。角度が変わる。もっと深い。もっと奥。今まで何にも触れられたことのない場所に、先生のおちんぼの先端がぐりっと押し込まれる。

「お……くっ♡♡ そこ、だめ……っ♡♡ 奥すぎ――あッ♡♡♡」